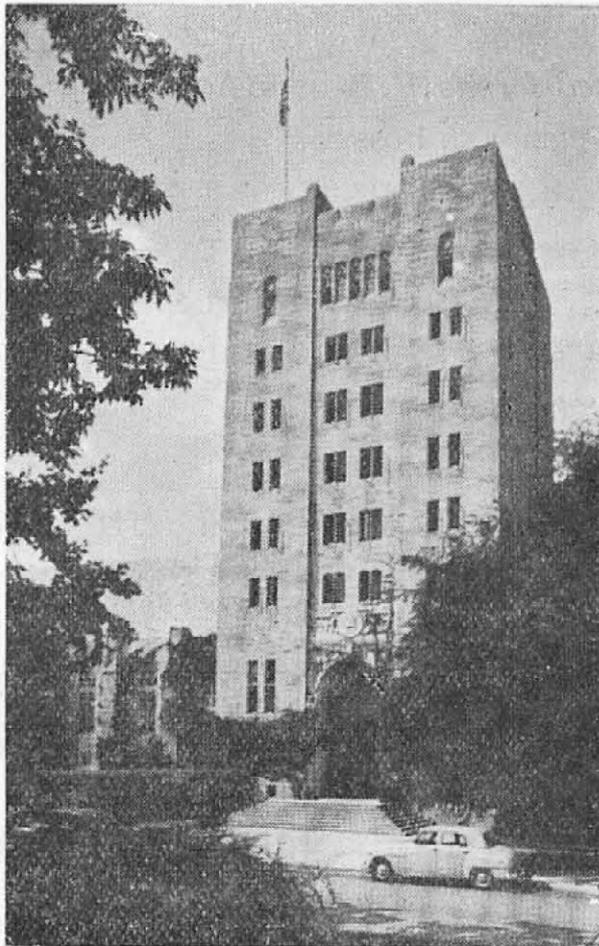


アメリカ藻類学会大会に参加して

今堀宏三

My Attendance at the Annual Meeting of the Phycological Society of America

8月24日から28日までの5日間、AIBS (American Institute of Biological Sciences) の大会がアメリカ中部 Indiana 州の Bloomington という小じんまりした大学町にある州立大学を会場として催された。AIBS は、アメリカの生物学関係の全学会の総合機関で、その中には大小 40 に余る学会が含まれ、今年度の総参加者数は、登録者数だけで 4,681 名で、モグリを加えると 6,000 人近いといわれ、講演総数 1,487 という盛大なものであつた。この学会のためには海外からも多くの著名学者が参加し、日本からも北大の福



インディアナ大学

士教授をはじめ数名の方々が、直接参加せられた。私は昨秋来 2 年間の期限で、アメリカ最小の面積・最長の名をもつ Rhode Island 州立大学に勤務している関係上、この大会に参加する機会を得た。

藻類学会関係では、まず 24 日に field trip が行われたが、スケジュールの関係で不幸にして参加の機を失つたが、付近に散在する湖沼を中心に淡水藻全般の採集が試みられ、すばらしかつたという参加者の話を後で聞き、大変残念だつた。論文発表は 26 日と 27 日の両日にわたり、アメリカ植物学会と共催の形で行われ、26 件に上つた。比較的小さな講義室で行われたために、100 人近い聴講者で、いつも満員の盛況であつた。講演

は水産関係 1, 分類 7, 生態 6, 形態 5, 発生 4, 生理 3 というように大別できたが, いずれも発表後熱心な質疑応答が行われたのには感心させられた。女性による発表件数もそのうちの 30% をしめ, しかもなかなか立派な講演態度と内容をもつ人が多かつたのは, 流石 Lady first の国柄と思われた。変わったのでは, 水鳥を猟銃で捕えて, その腸管内をしらべて, 発見された藻類の名をあげるとともに, その中のどういう種類が再生能力をもつたかというような発表があつたが, 内容そのものは特記すべきものはないものの, いかにもアメリカ大陸らしいゆつたりしたものであつた。一方, あらゆる精密機械を駆使して行われた純粹培養や実験発生の研究発表は, 貧乏世帯になれた私にとっては, 実にうらやましい限りであつた。

私は最後の日の終りから 2 番目に立ち, 渡米以来の仕事内容を紹介したが, スライドを主体にして, ゆつくりと, 時にじょうだんをまじえながら 20 分近く話したが, 皆よく聴いてくれて, これまでに経験したことのない楽しい思いをしながらの発表ができた。終了後藻類学会会長の WHITFORD 博士, 副会長の SILVA 博士をはじめ, 多くの知人や, 未知の人々までわざわざ握手を求めに來られて, 講演もよくわかり内容もよかつたとほめてくれたのは感激であつた。

大会の運営については, 日本の諸学会と大同小異ではあるものの, サービスはうんとわるく, 講演会場でも Presider 1 人の外には, 幻灯技師 1 人で, 万事を進行させている有様で, 講演番号の掲示すらないことは意外だつた。到着直後の登録にしても, 係員が少ないため長蛇の列で約 1 時間余りも待たされたが, 気の長い米人は誰 1 人文句をいう者もなく, コカコーラをのみながらおとなしく待つている有様は, 一寸日本ではまねのできない風景であつたろう。

藻類学会だけの懇親会はなく, 25 日夕食は分類学会, 27 日夕食は植物学会の懇親会で, それぞれの会で又多くの知人を得たことは収穫であつた。なお植物学会の席上では, 先述の SILVA 博士(昨秋 Bangkok の Pan Pacific Congress に参加後, 日本に立ちよられた)に対し, *Codium* に関する業績と, 藻類文献目録作成(アメリカ藻類会誌に分載された)この貢献によつて, 今年度の学会賞(賞金 250 ドル)を与えられたことは, 藻類学関係者一同のよるこびであつた。

27 日の夜 10 時すぎから大会センターに一同入り, 深更にいたるまで, 自由に歩き, 自由に語り, 自由に飲んで別れを惜しみつつ大会は終つた。